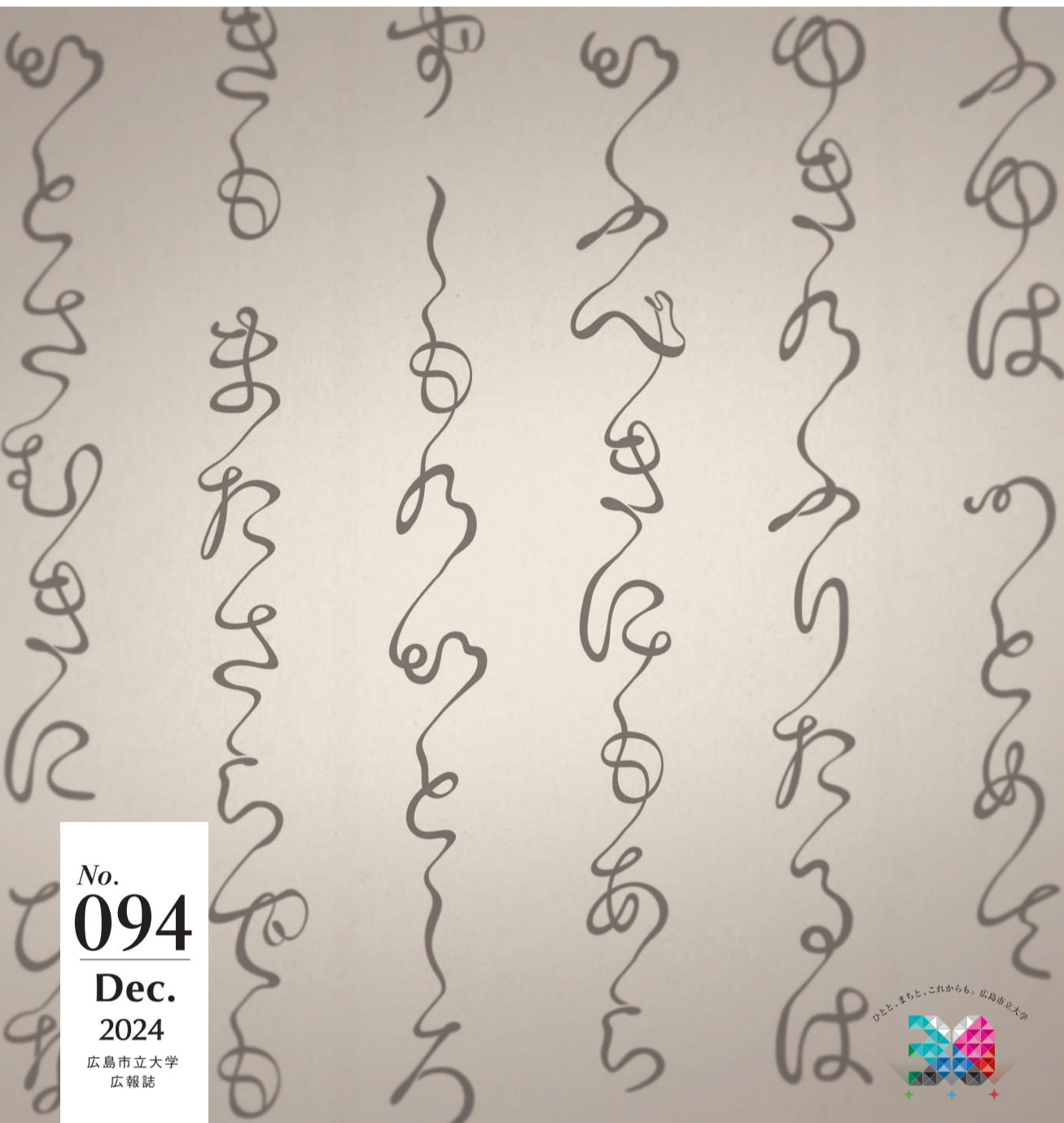


West Breeze

Hiroshima City University's founding principle is to become an international university which contributes to world peace and to the prosperity of the community through education and research in science and art.



No.
094

Dec.
2024

広島市立大学
広報誌

のりと、まち、これから。広島市立大学



研究室紹介

地域の企業で現場を観察し、自らを知る機会とする

国際学部・国際学研究所 講師 やまさき まさお **山崎 雅夫**

私は、人のマネジメントに関することを研究領域としています。専攻としては、経営学・人的資源管理論・経営組織論となります。主な研究内容は、能力開発とキャリアで、個人がどのようにすれば成長していくかを考えています。近年では、キャリアデザインという言葉が定着してきたように、キャリアを仕事としてだけでなく人生として捉えるようになってきています。これをライフキャリアという概念で呼びます。人生100年時代といわれる中で、個人が人生をどのように捉え、自らの価値を見出し、生き抜いていくかがポイントとなります。

研究室では毎年、3年ゼミ生と一緒にマツダ株式会社へ職場訪問として伺っています。これは、地域の企業を訪問し、その現場を観察するとともに、自らを知る機会として実施しています。職場訪問では、仕事



をされているところに伺ったり、社員の方々とのディスカッションをしたり、特別施設であるマツダミュージアムを見させてもらっています。

キャリア(過去・現在・未来)を考えていく上で、現場を知っておくことはとても重要です。また、自分が見ている自分が、想像している自分と一致しているかは、他者や外部から得られることによって確認できることも多いです。毎年、ゼミ生からは、職場訪問後の帰り道で3つの変化を確認できます。変化とは、(1)より真剣な表情をするようになる、(2)問いかけが深くなる、(3)未来のことを考えるようになる、です。このように、山崎研究室では、地域の企業を訪問し、その現場を観察するとともに、自らを知る機会を提供するように努めています。

本学における学位取得者 ※敬称略

本学大学院における博士学位取得者(2024年度 秋季修了)

国際学研究所 博士(学術) **SAMARAKOON S M MADHUWANTHI**
UDUMBARA KUMARIHAMI

外部資金の獲得

本学の教員は、国の制度である科学研究費助成事業や民間からの研究費などを受けて活発な学術研究活動を行っています。これらの外部資金を活用し、独創的・先駆的な研究に取り組んでいます。

2024年度 科学研究費助成事業採択状況<研究種別>

| 研究種目名 | 件数 | 計 |
|-----------|----|----------|
| 基盤研究(B)一般 | 2 | 12,485千円 |
| 基盤研究(C)一般 | 47 | 55,577千円 |
| 若手研究 | 10 | 14,168千円 |
| 合計 | 59 | 82,230千円 |

2023年度 受託研究費・共同研究費・補助金・奨学寄付金

| 区分 | 件数 | 計 |
|-------------|----|-----------|
| 受託研究費・共同研究費 | 66 | 64,906千円 |
| 補助金 | 5 | 46,692千円 |
| 奨学寄付金 | 9 | 9,295千円 |
| 合計 | 80 | 120,893千円 |

West Breezeについての
ご意見やご感想はこちらへ

広島市立大学 広報委員会
E-mail kikaku@m.hiroshima-cu.ac.jp
Tel 082 (830) 1666 Fax 082 (830) 1656



West Breezeの最新号・バックナンバーはウェブサイトからご覧いただけます。

広島市立大学広報誌のタイトル「West Breeze」は、広島市立大学のある西風新都にちなんで命名されました。
[West Breeze 94号] 編集・発行/広島市立大学 広報委員会 発行日/2024年12月1日

表紙作品

2023年度
芸術学研究科造形芸術専攻 修了
吉岡 日香里 (視覚造形)

「連組体 紡ぎ仮名」
Glyphsを使用したOpenTypeフォント
2023年度 修了制作
優秀賞



Hiroshima City University

〒731-3194 広島市安佐南区大塚東三丁目4番1号
Tel 082 (830) 1500 (代) Fax 082 (830) 1656
https://www.hiroshima-cu.ac.jp/

市大の 地域・社会貢献

本学は、広島市の公立大学として、地域と共生し、市民の誇りとなる大学を目指して、地域・社会貢献を推進しています。ここでは、本学の地域・社会貢献活動から「市大生チャレンジ事業」「いちだい地域共創プロジェクト」「受託研究」の事例を紹介します。

PICK UP

01

市大生チャレンジ事業

食を通じた国際理解 旅するテーブル

国際学部2年 いとう あゆの **伊藤 綾乃** (代表者)
すなだ ゆい **砂田 優衣**
にしむら 唯花 **西村 唯花**

アドバイザー ひらお じゅんべい 教育基盤センター 特任准教授 **平尾 順平**

協働・連携する外部の団体
・三篠公民館
・株式会社フレスタ



マレーシアの家庭料理作り

本学の国際学部で多様な文化について学ぶ学生3名が、留学生との交流を通して食文化に興味を持つようになったことをきっかけに、海外の人と関わる機会が少ない小学生の子どもたちを対象に、食を通じて世界に目を向けてもらえるようなイベントを企画・実施しています。2024年8月には、子どもたちと一緒にマレーシアの家庭料理を作るイベントを開催しました。このイベントは、三篠公民館に会場の提供、株式会社フレスタに食材の提供と調理指導のご



市大生チャレンジ事業

本学学生の豊かな人間性を育むとともに、自主性や問題解決能力を養成することを目的として、選定した課題や地域などから提案のあったテーマに基づき、学生自ら計画、実施する地域・社会貢献活動です。



左から西村さん、伊藤さん、砂田さん

協力をいただくなど、多くの方に助けけていただけて開催できました。

イベントには本学の留学生も参加して、自国の文化や宗教などについてプレゼンをしたり、民族衣装の試着体験なども行っています。参加した子どもたちが、食だけでなくその国の文化全般に親しみを持ちやすいイベントになるように工夫しています。子どもたちの笑顔や興味津々な顔を見ることができ、学生の励みになっています。今後もより多くの子どもたちが世界に興味を持ち、ワクワクできるようなイベントを企画していきます。

本学留学生が国の文化や宗教などを紹介



News

地域共創センターに名称が変わりました!

2024年4月、地域連携と研究推進を中心とした産学連携を強化し、地域共創に資する取り組みを一層着実に進めていくため、社会連携センターを改組して、地域共創センターを設置しました。主な取り組みとして、産学連携の推進、地域連携の推進、研究の推進、知的財産の管理と活用、学生の地域・社会貢献活動の支援、公開講座などがあります。地域共創センターは、地域の皆さま、産業界の皆さまと大学をつなぐ窓口です。連携事業等のお問い合わせがありましたら、本学教員とのマッチングを行いますので、お気軽にご相談ください。

地域共創センター



地域共創センター入口の看板が、芸術学部の永見文人教授が制作しました。



左から田村地域共創センター長、永見教授、若林学長

PICK UP

02

市大生チャレンジ事業

地域活性化のための 掲示板アプリ CocBan(コクバン)

情報科学研究科 博士前期課程2年 やまさき しょうすけ **山崎 陽介** (代表者)
うめだ けい **梅田 創**
やまね あま **山根 愛実**

アドバイザー 情報科学研究科 教授 ひら中 哲夫

協働・連携する外部の団体
・広島市内の町内会
および自治会
・広島市



CocBanのウェブサイト

CocBan
(YouTube)



CocBan
(ウェブサイト)



CocBan(コクバン)は、地域のコミュニケーションをより円滑にすることを目的として、情報科学研究科の学生3名で開発・運営している掲示板アプリです。誰でも簡単に使えるインターフェースを備えた、地域の情報共有や助け合いを促進するためのツールです。町内会や自治会(以下、町内会)のイベント告知や電子回覧板などに活用していただき、CocBanを通じて、町内会イベント参加率向上や若者の関心を引き出すことを目指し、地域活性化に貢献したいと考えています。さらに、登録に必要な個人情報は名前のみとし、シンプルで使いやすい作りになることで、デジタルツールを導入する際の課題を解決しました。また、役員が登録者の閲覧確認をする手間が省けるように、既読機能等も搭載しています。

現在、安佐南区を中心に広島市の社会福祉協議会や町内会で導入が進み、一定の効果が得られています。2024



毘沙門台学区「LMO毘沙門台」の方にアプリを紹介

年度内に広島市の15%の町内会での普及を目指し、さらなる機能拡充を行いながら、地域に密着したコミュニケーションツールとして進化させていく予定です。

市大の地域・社会貢献

地域の団体と教職員、学生で課題解決に取り組む

PICKUP 03

いちだい地域共創プロジェクト

デジタル技術による福王寺の魅力発信プロジェクト

情報科学研究科講師 馬場 雅志 × 福王寺山魅力アップ市民プロジェクト実行委員会

仁王像撮影の様子



2028年に開基1200年を迎える福王寺(安佐北区可部地区)。「これを機に福王寺の魅力を広めたい」という地元団体の思いを受け、CGなどのデジタル技術を使い、普段は見ることのない仏像や法具などの文化財を立体画像として再現するなど、情報科学研究科の馬場講師と博士前期課程1年の吉田一稀さんが、この活動に取り組んでいます。可部地域の「文化のまちづくりプロジェクト」の気運醸成を進め、魅力を紹介する素材になればと考えています。

PICKUP 05

いちだい地域共創プロジェクト

熊野町つなぐプロジェクト

教育基盤センター特任講師 三上 賢治 × 熊野町つなぐプロジェクト

ふるさと納税返礼品の企画案をプレゼンテーション



広島県安芸郡熊野町には、豊かな自然環境やアウトドアなどの多目的施設、飲食店などが点在していますが、町内外の認知度が低く利用が少ないという課題がありました。本プロジェクトでは、地域住民や学生が、地域で活躍する人に取材をし、SNSを中心とした情報発信を行うことで、熊野町に対する関心を高めることを目的としています。地域の方々とのつながりをつくり、熊野町役場と連携しながら「ふるさと納税返礼品」の企画・開発に取り組んでいます。

PICKUP 04

いちだい地域共創プロジェクト

広島湾岸トレイル構想事業

芸術学部准教授 藤江 竜太郎 × 広島湾岸トレイル協議会

地図の読み方などの基礎的な知識を学ぶ



「広島湾岸トレイル」は、広島湾を囲む、長さ200km以上に及ぶ山道です。広島湾岸トレイル協議会が中心となり、年間を通してこの長いトレイルを整備しています。「山歩きの魅力を伝えるPRツールを作ってもらいたい」という要望に、芸術学部の藤江准教授と探検部、ワンダーフォーゲル部が応え、現在新たなトレイルルート(広島市立大学〜横川駅)の作成を進めています。山の知識を習得しながらPRツール作成の活動を行っています。

PICKUP 06

受託研究

ひろしまLMOロゴマークデザイン

芸術学部教授 納島 正弘 × 広島市

プレゼンテーション後の記念写真



広島型地域運営組織「ひろしまLMO(Local Management Organization)」のロゴマークのデザインを広島市から依頼され、芸術学部デザイン工芸学科(視覚造形)の2年生(当時)4名が取り組みました。いくつもの案案を考えた上で、各自3案ずつを選び、松井市長にプレゼンテーションしました。審査の結果、地域の絆を連想させる「もやい結び」をモチーフにした案が採用されました。広島市や「ひろしまLMO」がウェブサイトなどで使用しています。

活躍する市大人

在学生、卒業生を問わず、国内外のさまざまな分野で活躍する「市大人」を紹介します。



留学生と交流した思い出

未来につながる経験を積む



すずき りゅうへい 鈴木 琉平

情報科学研究科(博士前期課程) システム工学専攻2年

ろな知識や知見を身に付けてから働きたいと思ったのが大学院進学を決めた大きな理由の一つです。もう一つの理由は、ハノーバー専科大学第4学部とのダブル・マスター・ディグリープログラム*です。学部生時代に休学して1年間ほど留学し、他国の文化圏で勉強する経験をしたと思っていましたが、コロナ禍によりそれが叶いませんでした。そのため情報科学研究科でこのプログラムがあると聞いて、進学したいと思いました。

ダブル・マスター・ディグリープログラムに参加してよかった点を教えてください。

ダブル・マスター・ディグリープログラムを通して大きな学びが2点ありました。1点目は自分の意見をしっかり持つことで、2点目は異文化交流による価値観の広がりを感じたことです。

一大学院での学生生活について教えてください。

大学院では、アルバイトと研究のバランスを考えて生活しています。学部生時代(特に4年生)は授業がない時間はひたすらアルバイトをして時間を埋めていました。しかし研究室に配属となって、卒業論文のための研究を進める中で、アルバイトに多くの時間を割いていた生活では研究をする時間が取れず、研究の進捗があまりよくないと感じていました。そこで、大学院では奨学金を申請し、アルバイトの時間を削って、授業以外の時間を研究に使えるようにしました。その結果、学部生の頃



チェコで開催された国際学会での発表の様子

よりも規則正しい生活が無理なく送れています。

一今後の活動予定や、目標があれば教えてください。

今後は留学した経験を生かして国際学会に出席する予定です。また目標としてはグローバルに活躍できる社会人として世の中に貢献していきたいです。

一学部の後輩たちへメッセージをお願いします。

大学生は時間を自由に使える機会がたくさんあります。その時間の過ごし方次第で卒業後の生き方が変わると私は思っているので、ぜひ有意義な時間の使い方をしてほしいです。

*広島市立大学大学院情報科学研究科博士前期課程とドイツ・ハノーバー専科大学第4学部修士課程において、両大学から修士号を取得することが可能。

column いちだい地域共創シンポジウム in ホームカミングデー開催



30th Anniversary

第1部 基調講演

「地域と大学のこれからをともに考え、創る」

ローカルジャーナリスト・島根県立大学地域政策学部准教授

田中 輝美 氏

10月26日(土)、大学祭と同日に、「開学30周年記念シンポジウムinホームカミングデー」を開催しました。第1部となるシンポジウム前半では、ローカルジャーナリストで島根県立大学准教授の田中輝美氏をお招きして、基調講演を行いました。地方が抱える課題をマイナスとして捉えるだけではなく、「魅力」として考え、課題解決先進地となるために、学生や大学が地域とどう協力していくかを活動例とともにお話いただきました。地域と大学は運命共同体であることや、人口は増えないという前提で幸せな地域社会をどのようにつくっていけばよいのかを考えさせられる講演でした。



第2部 パネルディスカッション

トークテーマ

「地域と大学のこれまでとこれから」

第2部はシンポジウム後半として、パネルディスカッションを行いました。第1部で講師を務めた田中輝美氏、本学卒業生で横川エリアを拠点に活動する染織作家の片島蘭氏、いちだい地域共創プロジェクトで地域のICT化の活動に関わっている情報科学研究科の岩根典之准教授、本学の地域連携コーディネーター勢良寛氏の4名がパネラーとなり、平尾順平特任准教授が司会を務め、それぞれの立場から大学と地域の現在と将来の展望を語りました。地域と大学が関わることもおもしろさや課題、今後の可能性をテーマにした議論は、中高生や他大学の関係者、地域の方など参加者の強い関心を引きました。



第3部 ホームカミングデー

前半:卒業生によるトークセッション

後半:同窓会大懇親会

第3部はホームカミングデーでした。このイベントは、開学20周年の2014年に初めて開催されました。今回はトークセッションと懇親会の2部構成で、卒業生、在学生、教職員、約70名の方々に参加いただきました。トークセッションでは、卒業生の若林麻衣子氏(福岡放送アナウンサー)の司会のもと、卒業生3名から、いちだいの思い出などをお話いただきました。懇親会では、卒業年度ごとにテーブルを囲み、思い出話を花を咲かせ、最後は全員で学歌を斉唱しました。



Advertisement for Ichirepo, featuring a QR code and social media links.

田中さんが代表を務めるパラバリーではどのような活動をしているのか教えてください。
身体的な障がいを持つ方たちは、挑戦する者という意味で、チャレンジと呼ばれることが多く、パラスポーツを通じて健康者とチャレンジが繋がります。パラスポーツの楽しさをもっと世間に広めようという活動をしています。
一具体的な活動としては、どういったことをしているのですか。
昨年の冬、パラスポーツイベントに参加し、チャレンジの方と交流したことをきっかけに、学生主催のパラスポーツイベントをしたいと思い、メンバーを募って企画しました。また、視覚障がいのある、白杖ユーザー、グランドをひろめる会、代表の森井さんと縁をいただき、今年の大学祭では、会に所属する方と協力して、視覚障がい者体験できるブースを設置し、クロックポイント、ブロックの展示を行いました。多くの方にチャレンジの方たちを知っていただくきっかけになったと思うので、今後はSNSでの発信もしていきたいと考えています。
一なるほど。そういった活動で実際にチャレンジの方と関わってみたい、気付いたことはありますか。
視覚障がいの方は声掛けや配慮があると助かるという話を聞いて、普段自分が気付いていないことに気が付くことができるようになります。視野が広がると、障がいを持つ方へ声掛けや手助けを進んで行えるようになります。
一活動を進じて視野がぐんと広がったんですね。今後の活動の目標はありますか。
多くの方にパラスポーツのイベントに参加してもらって、性別や年齢、身体的障がいの有無に関係なく、みんなでパラスポーツを楽しめるようになってほしいと思います。
一田中さん、ありがとうございました！
インタビューを終えて
今回インタビューしてみても、こんなにも頑張っている熱い学生が本学にいたのだと感動しました。
これから頑張っている学生と、たくさんインタビューして、多くの人を知ってほしいように広報活動を頑張りたいです！

田中さんが代表を務めるパラバリーではどのような活動をしているのか教えてください。
身体的な障がいを持つ方たちは、挑戦する者という意味で、チャレンジと呼ばれることが多く、パラスポーツを通じて健康者とチャレンジが繋がります。パラスポーツの楽しさをもっと世間に広めようという活動をしています。
一具体的な活動としては、どういったことをしているのですか。
昨年の冬、パラスポーツイベントに参加し、チャレンジの方と交流したことをきっかけに、学生主催のパラスポーツイベントをしたいと思い、メンバーを募って企画しました。また、視覚障がいのある、白杖ユーザー、グランドをひろめる会、代表の森井さんと縁をいただき、今年の大学祭では、会に所属する方と協力して、視覚障がい者体験できるブースを設置し、クロックポイント、ブロックの展示を行いました。多くの方にチャレンジの方たちを知っていただくきっかけになったと思うので、今後はSNSでの発信もしていきたいと考えています。
一なるほど。そういった活動で実際にチャレンジの方と関わってみたい、気付いたことはありますか。
視覚障がいの方は声掛けや配慮があると助かるという話を聞いて、普段自分が気付いていないことに気が付くことができるようになります。視野が広がると、障がいを持つ方へ声掛けや手助けを進んで行えるようになります。
一活動を進じて視野がぐんと広がったんですね。今後の活動の目標はありますか。
多くの方にパラスポーツのイベントに参加してもらって、性別や年齢、身体的障がいの有無に関係なく、みんなでパラスポーツを楽しめるようになってほしいと思います。
一田中さん、ありがとうございました！
インタビューを終えて
今回インタビューしてみても、こんなにも頑張っている熱い学生が本学にいたのだと感動しました。
これから頑張っている学生と、たくさんインタビューして、多くの人を知ってほしいように広報活動を頑張りたいです！

Interview with student Tanihara Ryohei, featuring photos and text about his activities.